

吹田市の人口 現状分析及び将来人口推計 (平成27年6月)

I 現状分析

- 1 吹田市の人口推移と将来推計
- 2 年齢階級別人口 -人口ピラミッド
- 3 年齢3区分別人口の推移
- 4 人口動態 (1) 自然増減 ①出生数・死亡数 ②合計特殊出生率
(2) 社会増減 ①転入数・転出数 ②年齢階級別人口移動
③転入元・転出先 (府内) 及び (府外全国)
- 5 吹田市の産業人口 (1) 従業者数・事業所数
(2) 産業別人口

II 人口の将来推計

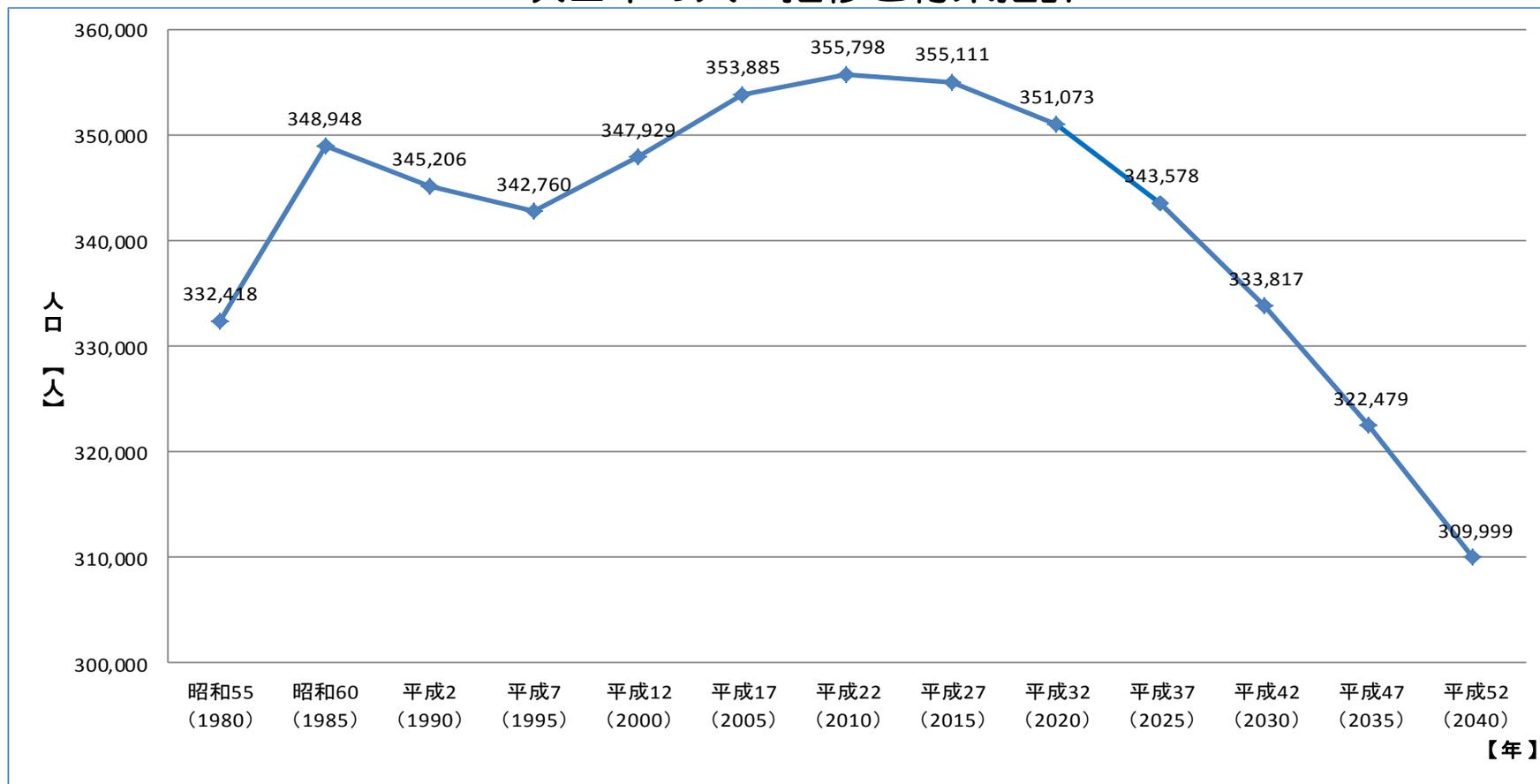
- 1 出生率によるシミュレーション (1) 将来推計人口
(2) 人口構造の若返り
- 2 人口移動によるシミュレーション
- 3 将来展望

I 現状分析

1 吹田市の人口推移と将来推計

- 国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）が公表した推計（平成25年3月）では、平成52年には約31万人まで人口が減少
- 平成22年 355,798人⇒平成52年 309,999人 【30年間で45,799人の減、人口減少率12.9%】

吹田市の人口推移と将来推計



出典：昭和55年～平成22年までは国勢調査、平成27年以降は社人研「日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）」

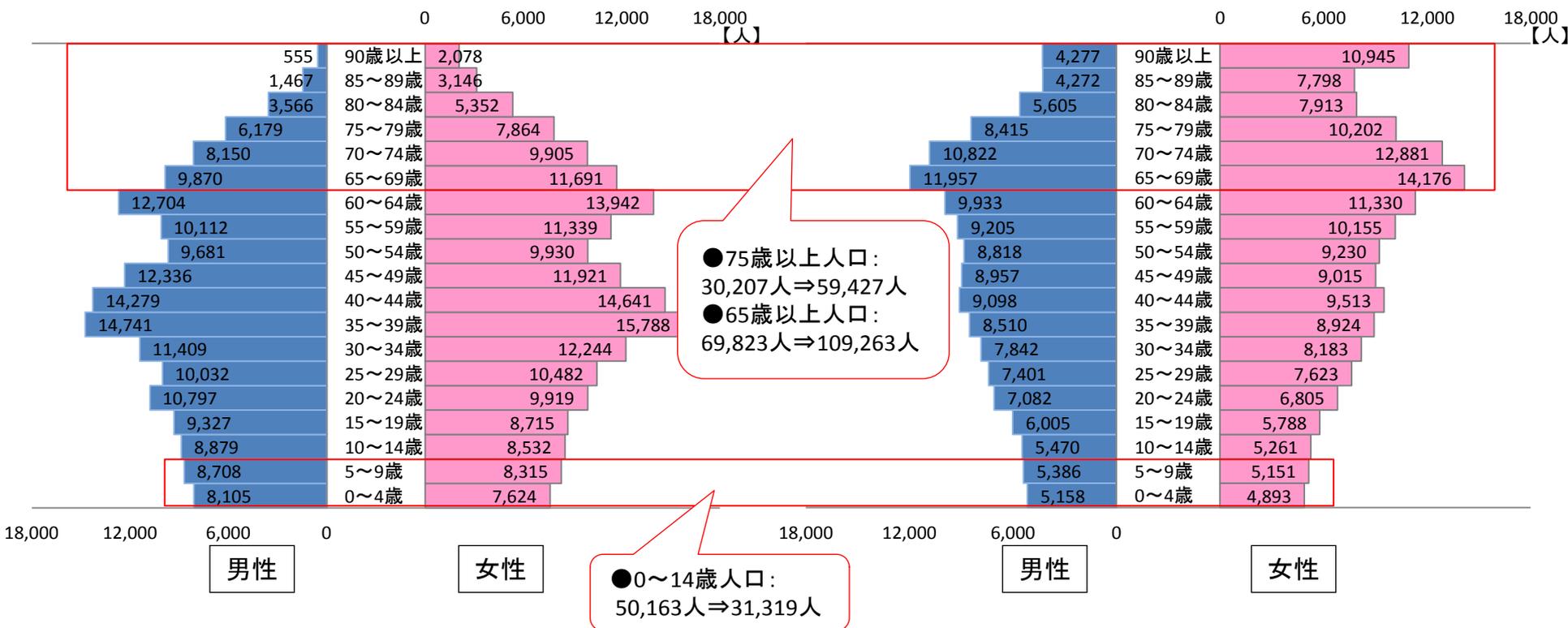
2 年齢階級別人口 - 人口ピラミッド

- 平成52年には老年人口が増加し、年少人口が減少
⇒ 75歳以上人口は、平成22年のほぼ2倍に
0~14歳人口は、約38%減少

吹田市の人口ピラミッド

平成22(2010)年

平成52(2040)年

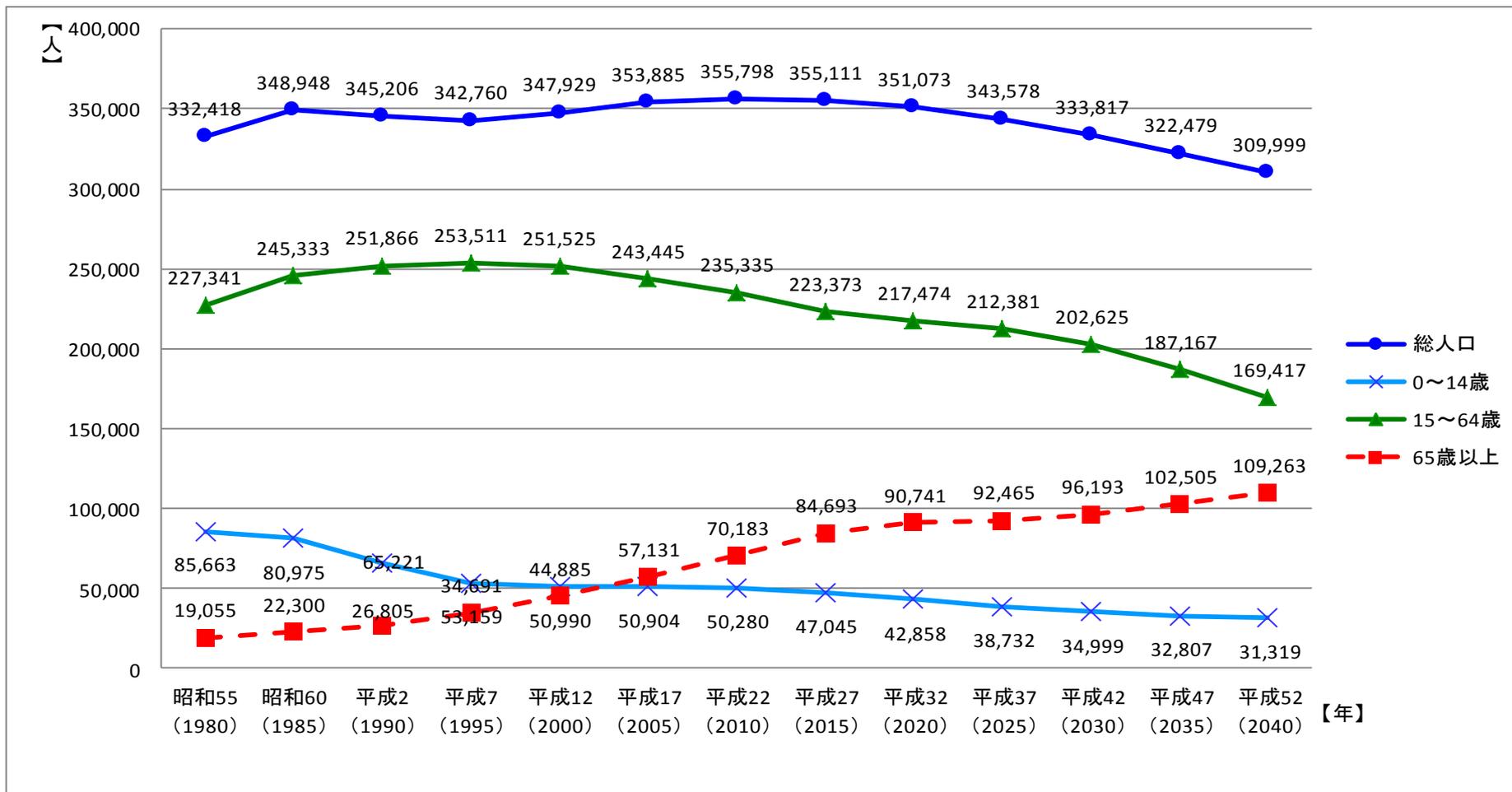


出典：平成22年は国勢調査、平成52年は社人研「日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）」の数値から

3 年齢3区分別人口の推移

- 生産年齢人口（15～64歳）は、平成7年以降、減少傾向
- 平成17年には、老年人口（65歳以上）と年少人口（0～14歳）が逆転
- 今後、老年人口が増加し続け、平成52年には全体の35%が65歳以上となり、生産年齢人口 約1.6人で1人の老年人口を支えることになると推計されている

吹田市の年齢3区分別人口の推移

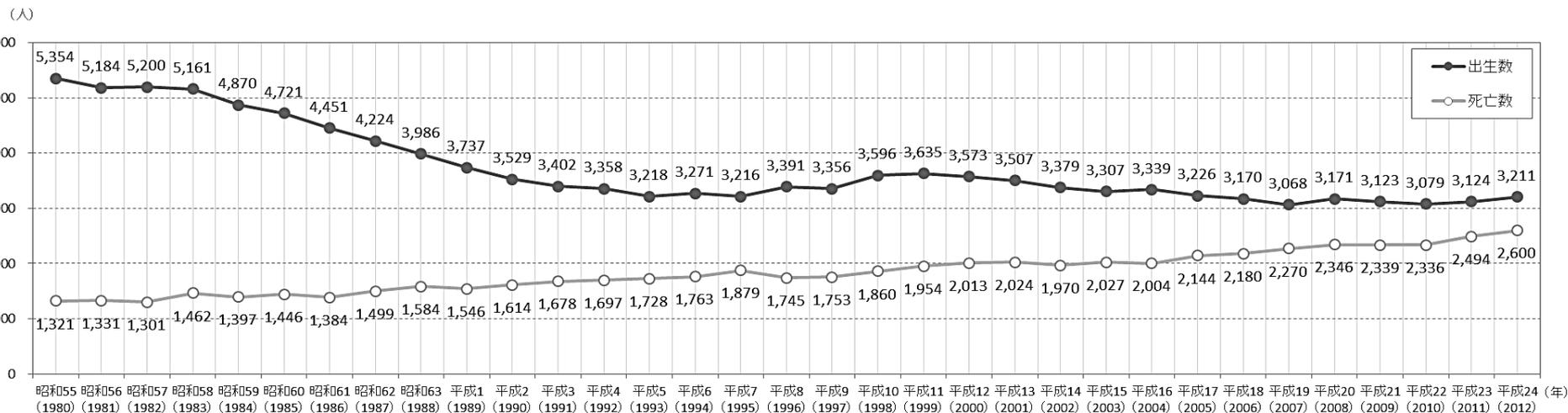


出典：昭和55年～平成22年までは国勢調査、平成27年以降は社人研「日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）」

4 人口動態 (1) 自然増減 ① 出生数・死亡数

- 平成55年以降、出生数は減少傾向
特に昭和59年から平成5年にかけて大きく減少
平成19年以降は減少傾向がやや抑えられ微増しているものの、出生数は3千人台前半で推移
- 死亡数は緩やかな増加傾向
- 死亡数と出生数との差が縮まってきている
⇒ このまま出生数が増加しなければ、自然減（死亡数が出生数を上回る）に転じる可能性がある

吹田市の出生数・死亡数の推移

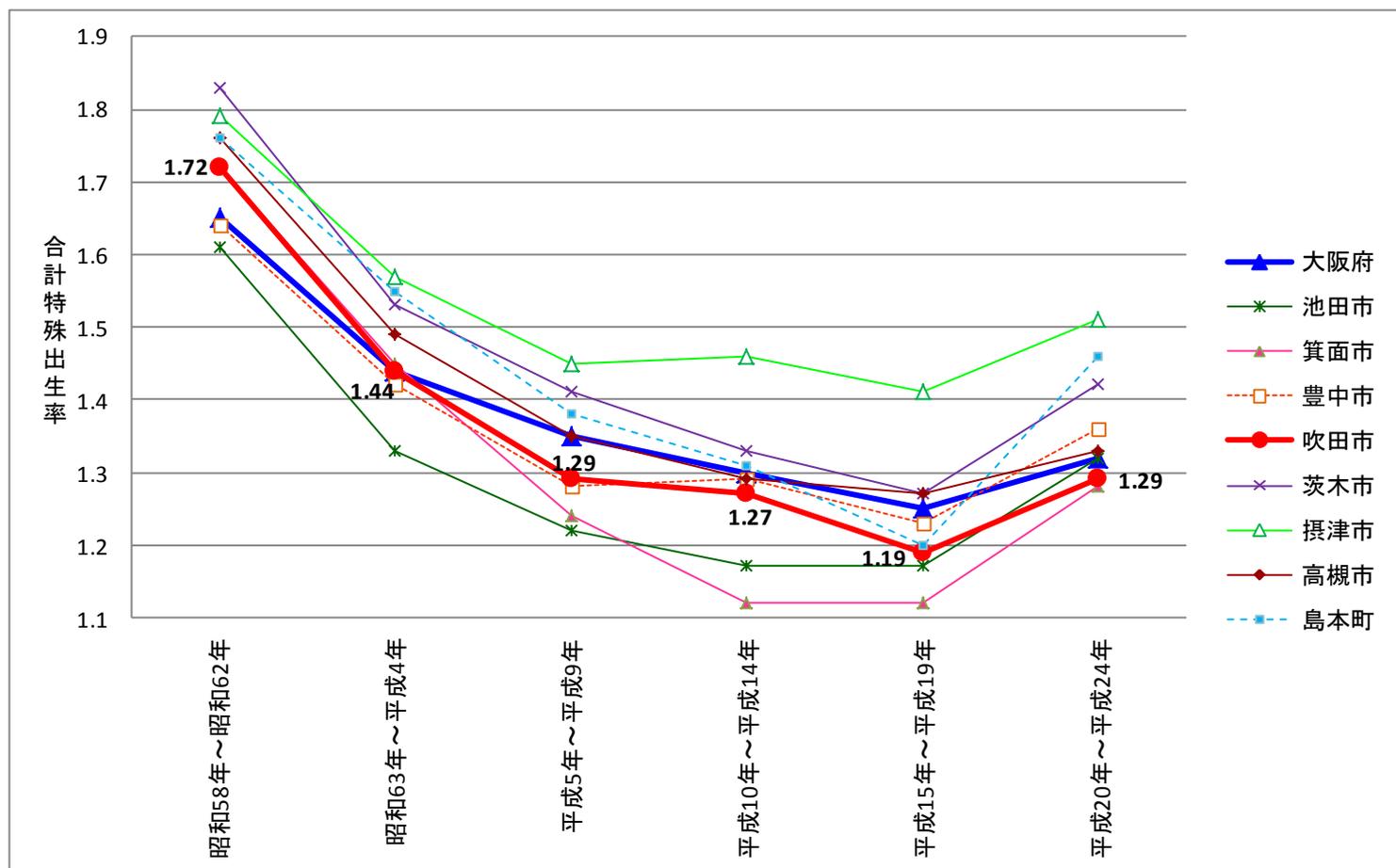


4 人口動態 (1)自然増減 ②合計特殊出生率

●合計特出生率…1人の女性が一生に産む子どもの平均人数

●吹田市は、平成5年～9年以降、大阪府の数値を下回り、平成20～24年には、北摂各市の中で箕面市に次いで2番目に低い水準となっている

吹田市及び北摂各市の合計特殊出生率の推移

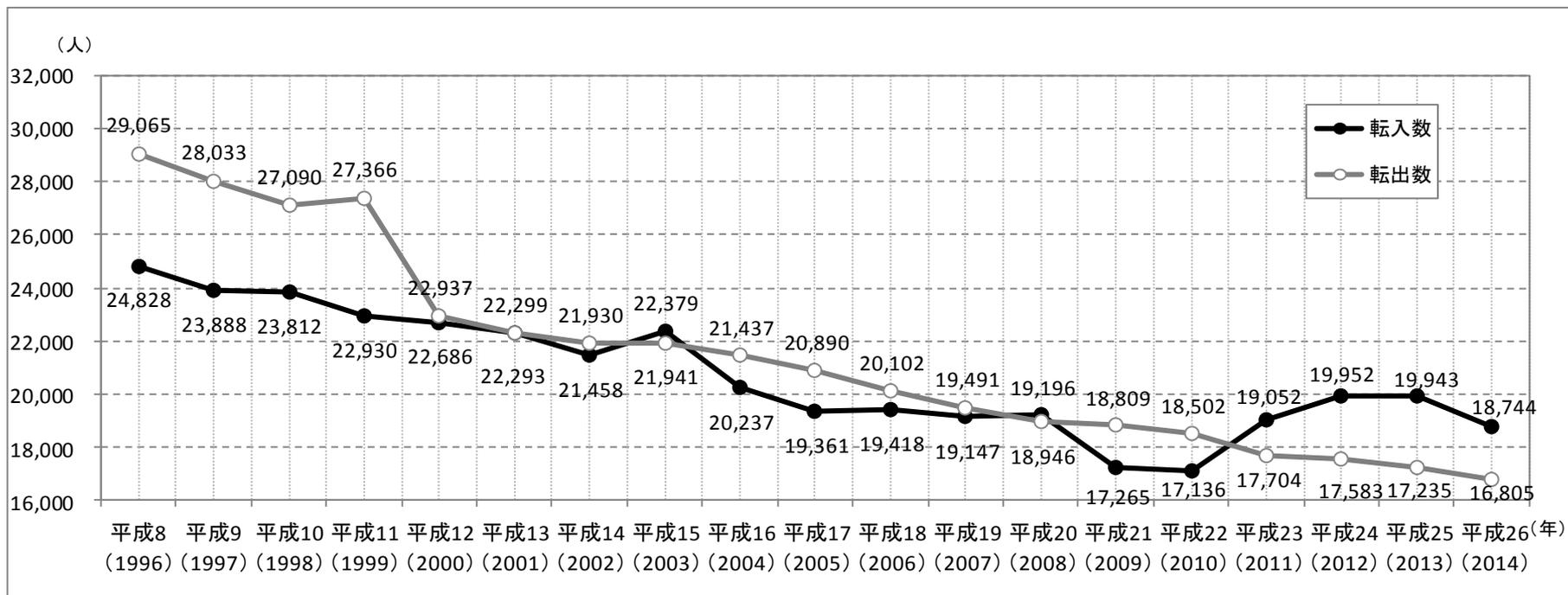


4 人口動態 (2)社会増減 ①転入数・転出数

●転入数、転出数ともに、いずれも減少傾向

●平成11年までは、4千人前後の転出超過が続いていたが、それ以降、社会増、社会減を繰り返し、平成23年以降は転入数が増加し、4年連続転入超過

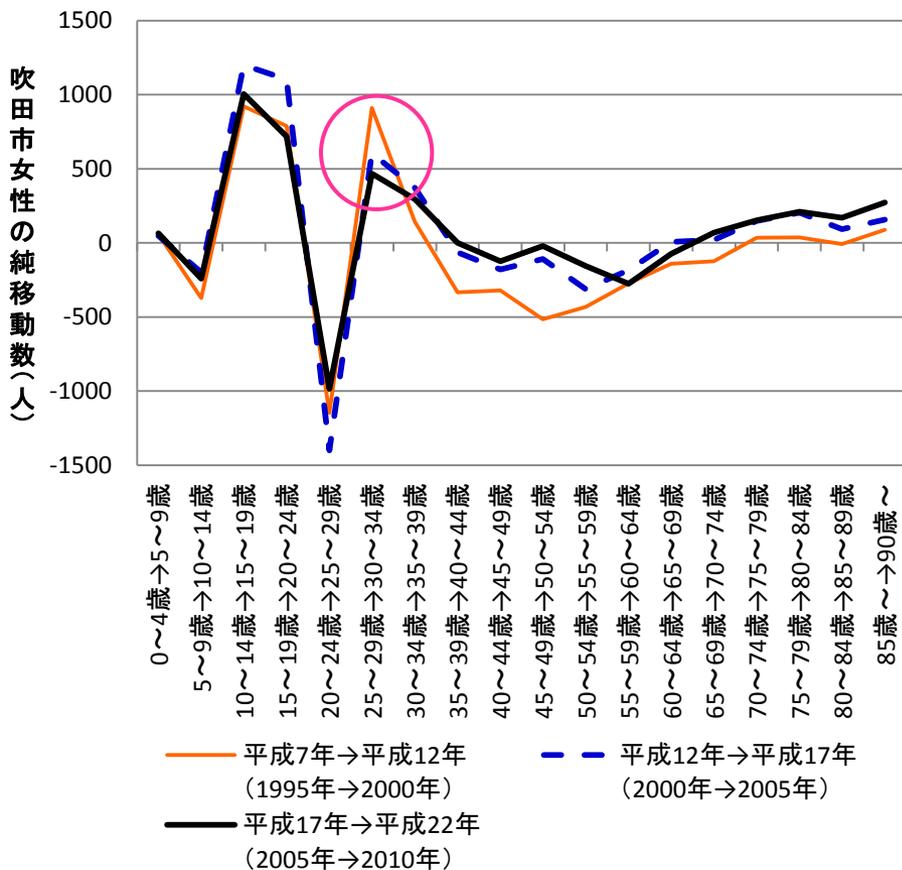
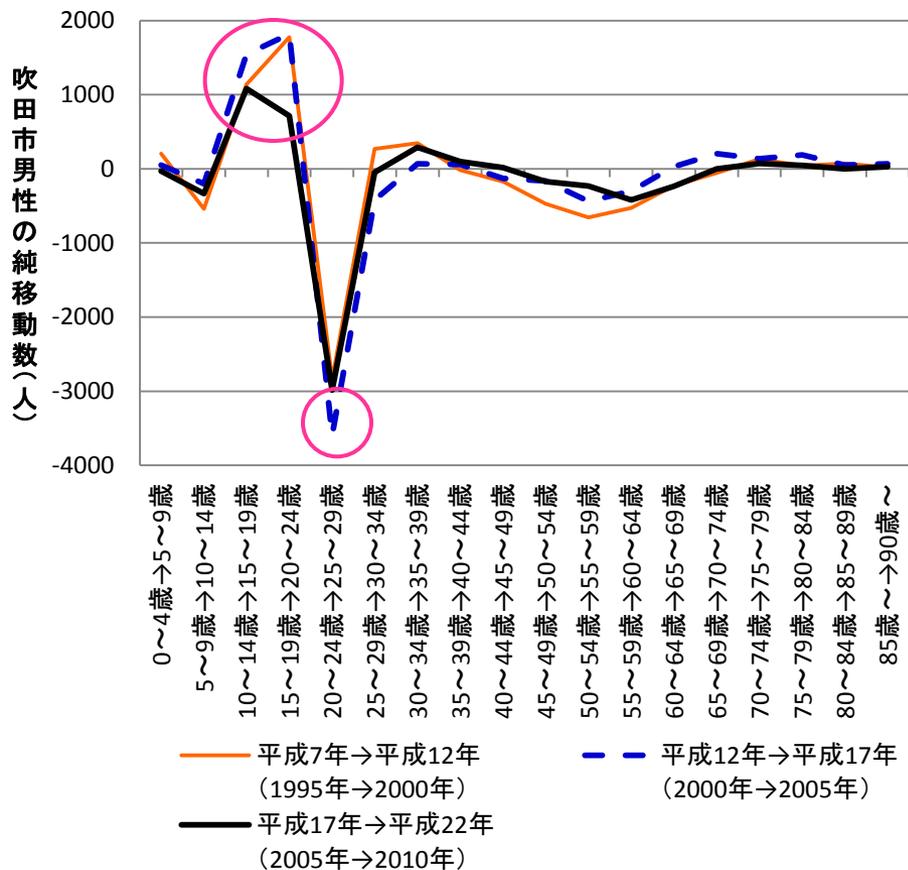
吹田市の転入数・転出数の推移



4 人口動態 (2) 社会増減 ② 年齢階級別人口移動

- 転入超過が多い年代は、「10～14歳の人」が15～19歳になる間 「15～19歳の人」が20～24歳になる間
⇒ 高校・大学へ進学する年齢層の転入が多い
- 転出超過が多い年代は、「20～24歳の人」が25～29歳になる間
⇒ 卒業後に就職する年齢層の転出が多い
- 女性は「25～29歳→30～34歳」「30～34歳→35～39歳」も転入超過が多い（結婚等により吹田市へ?）

吹田市の年齢階級別・男女別純移動数の推移

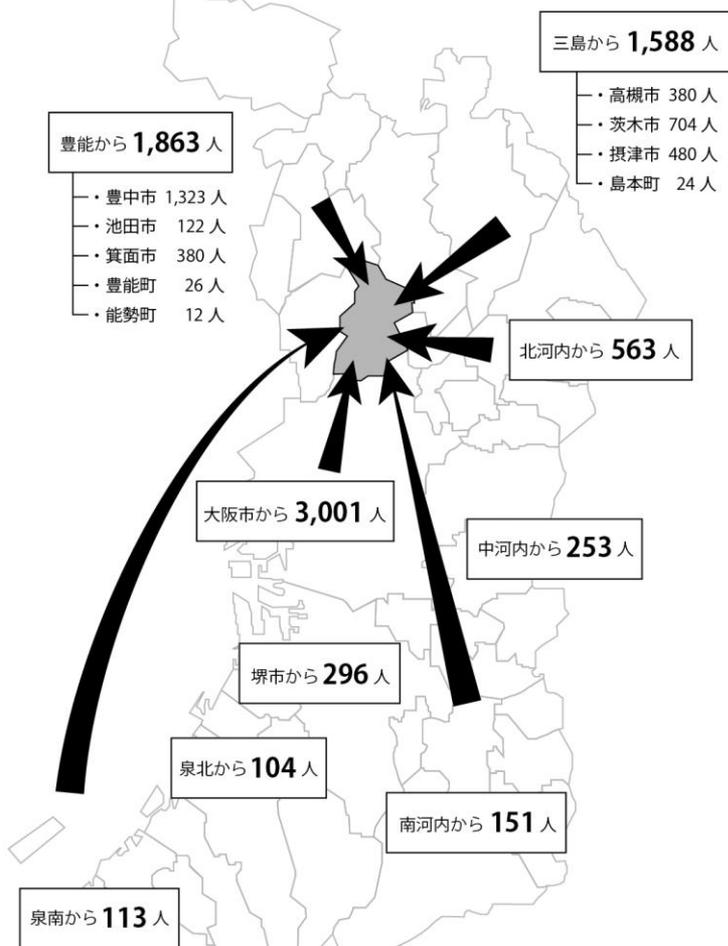


出典：「国勢調査」による市区町村別男女5歳階級別人口と、厚生労働省大臣官房統計情報部「都道府県別生命表」を用いて推定した市区町村別男女5歳階級別純移動数と純移動率

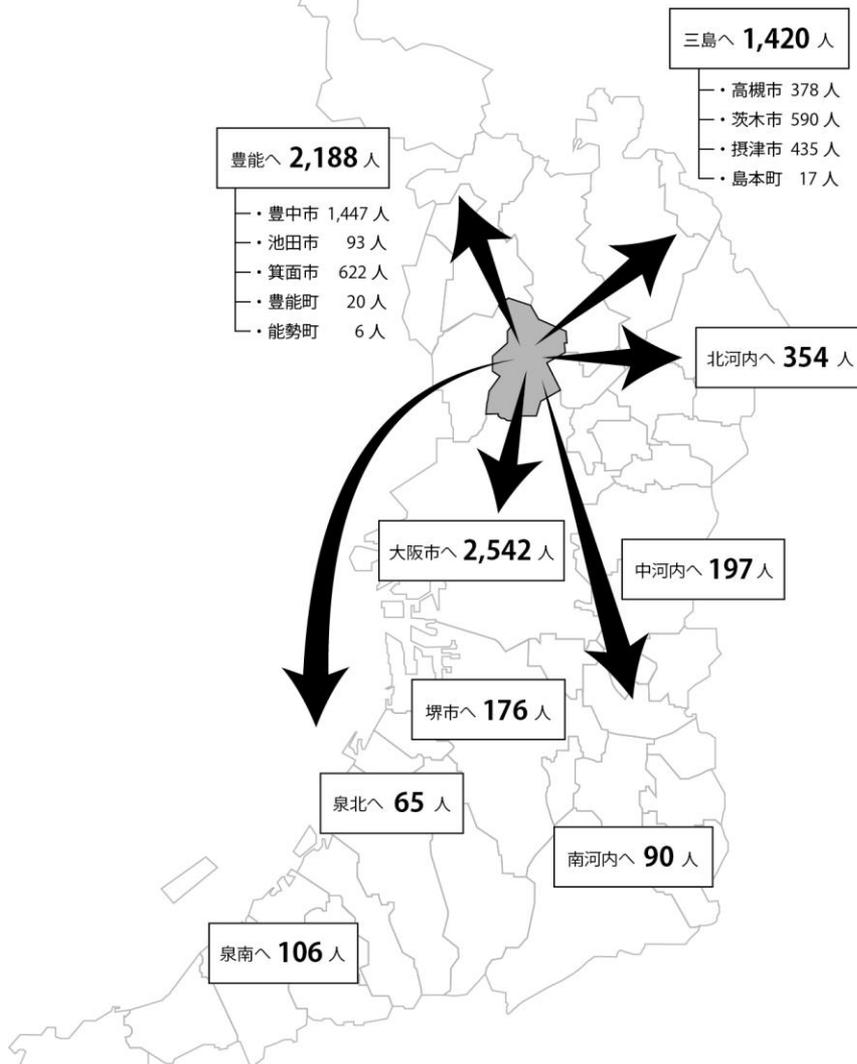
4 人口動態 (2) 社会増減 ③ 転入元・転出先(府内)

- 府内からの転入は、大阪市からの転入者数が最も多い(3,001人)、次いで豊中市(1,323人)
- 府内への転出は、大阪市への転出者数が最も多い(2,542人)、次いで豊中市(1,447人)
- 転出超過となった相手先は、箕面市(▲242人)、豊中市(▲124人)

吹田市への転入者の転入元



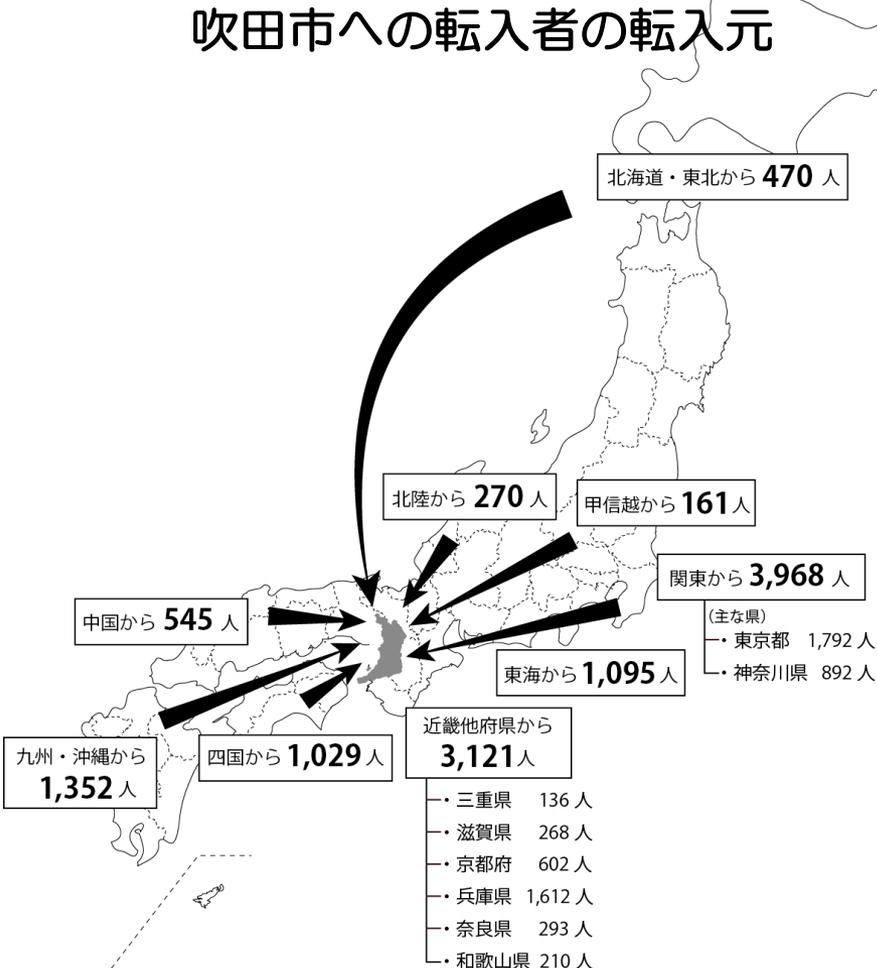
吹田市からの転出者の転出先



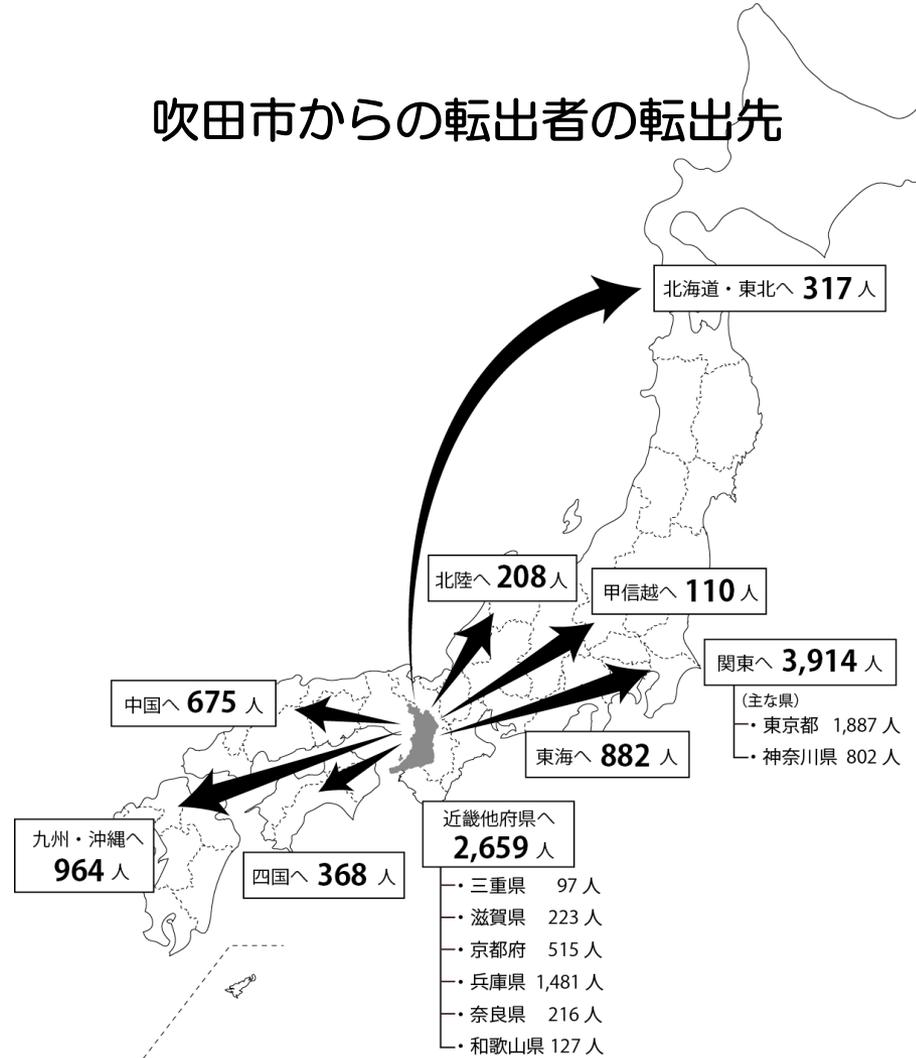
4 人口動態 (2)社会増減 ③転入元・転出先(府外全国)

- 府外からの転入は、東京都からの転入者数が最も多い(1,792人)、次いで兵庫県(1,612人)、神奈川県(892人)
- 府外への転出は、東京都への転出者数が最も多い(1,887人)、次いで兵庫県(1,481人)、神奈川県(802人)
- 転出超過となった相手先は、東京都(▲95人)

吹田市への転入者の転入元



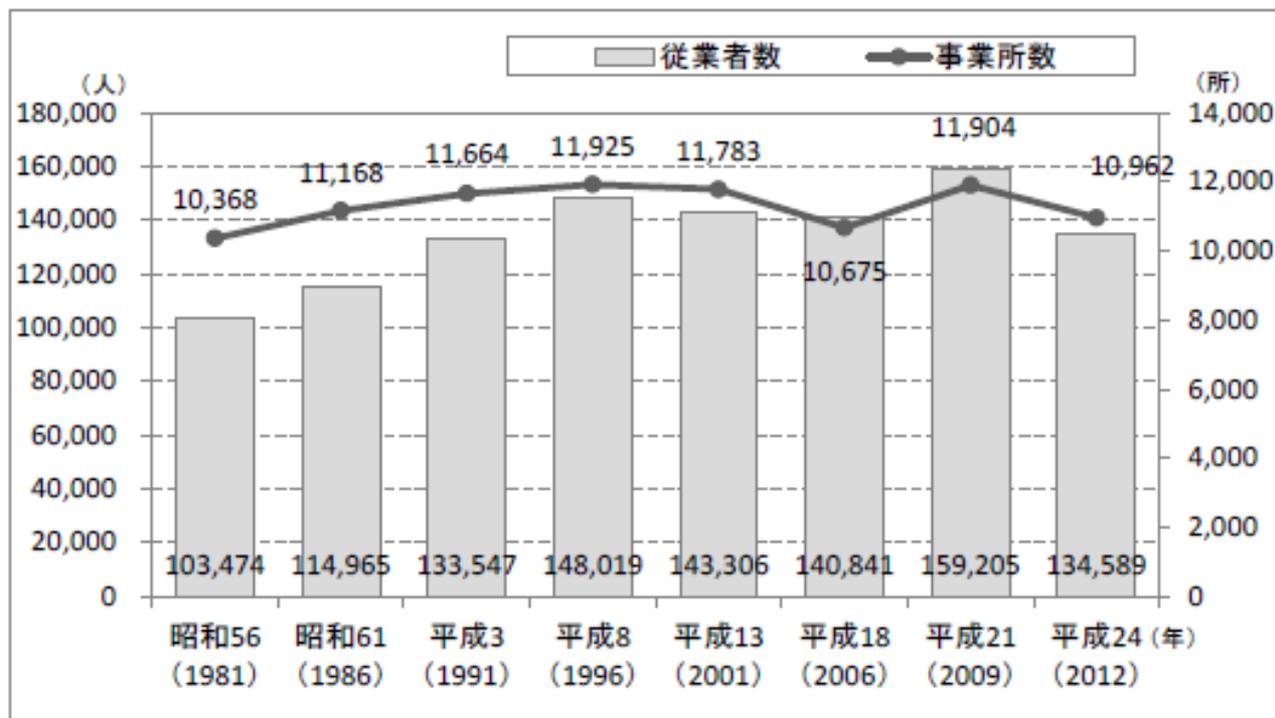
吹田市からの転出者の転出先



5 吹田市の産業人口 (1) 従業者数・事業所数

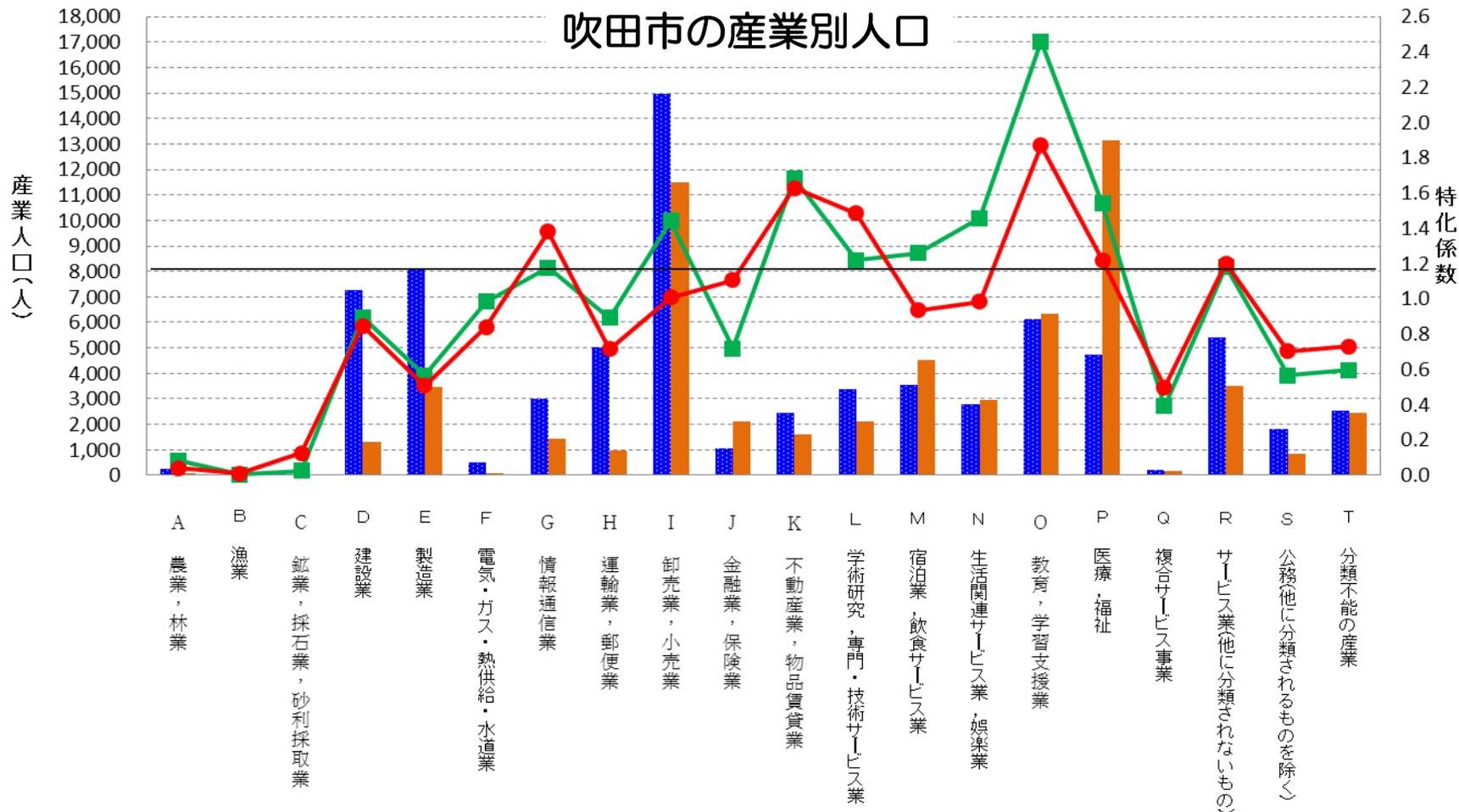
- 事業所数は、平成8年のピーク時には11,925事業所であったが、平成24年には10,962事業所に減少
- 従業者数は、平成21年に159,205人とピークを迎え、平成24年は減少

吹田市の従業者数・事業所数



5 吹田市の産業人口 (2) 産業別人口

- 特化係数…当該産業において、全国と比較した就業者比率の高さ
(1を超えると国と比較して就業者比率が高いといえる)
- 卸売業・小売業の就業者が多い(特に男性で顕著)
- 次いで、医療・福祉の就業者数が多い(特に女性で顕著)
- 特化係数は、教育・学習支援業が男女ともに最も高い



出典: 国勢調査 (平成22年)

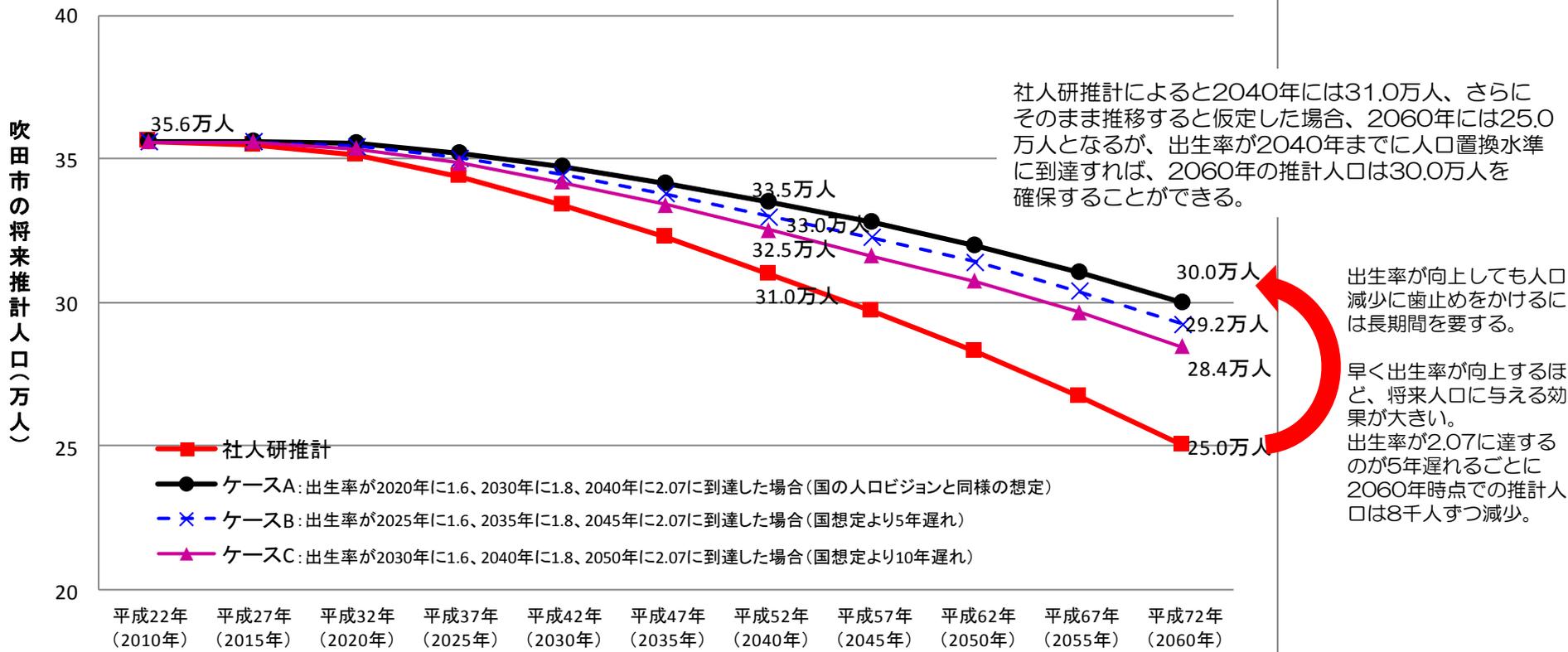
■ 男性 従業者数 ■ 女性 従業者数 ■ 男性 特化係数 ■ 女性 特化係数

Ⅱ 人口の将来推計

1 出生率によるシミュレーション (1) 将来推計人口

- 社人研の推計では、吹田市の将来人口は、2040年に31.0万人、平成2060年には25.0万人に減少
- 出生率によるシミュレーション
 - ◎ケースAは、合計特殊出生率が2040年までに人口置換水準である2.07に上昇した場合
 - ◎ケースB及びケースCは、ケースAからそれぞれ5年遅れ、10年遅れで2.07に上昇した場合

吹田市の将来推計人口のシミュレーション



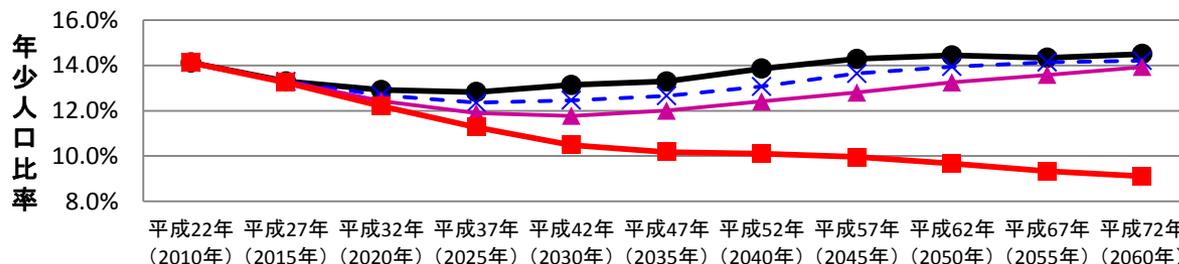
出典：昭和55年～平成22年までは国勢調査、平成27年～52年は社人研「日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）」、平成57年以降は平成52年の出生・死亡・移動等の傾向がその後も継続すると仮定して推計した場合

1 出生率によるシミュレーション (2) 人口構造の若返り

●人口減少に歯止めがかかると、人口規模及び構造が安定するとともに人口構造が「若返る」

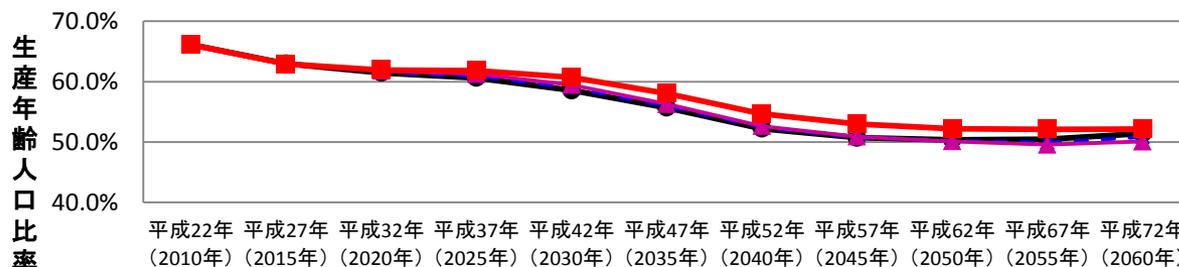
吹田市の年齢3区分別将来推計人口のシミュレーション

● ケースA × ケースB ▲ ケースC ■ 社人研推計

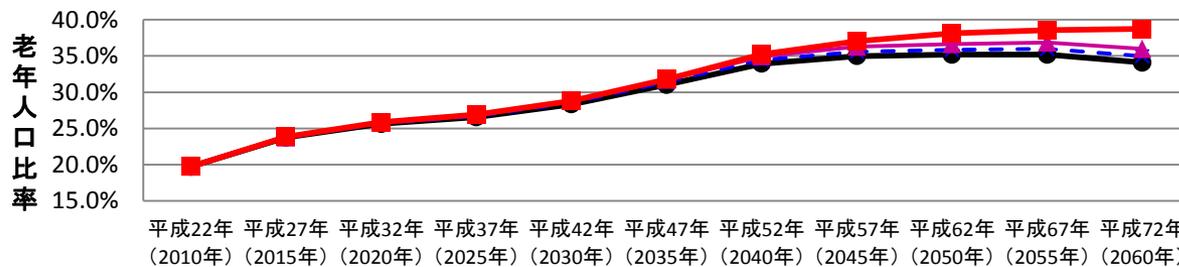


社人研推計によると、今後、年少人口は年々減少していくが、出生率の向上が図られた場合（ケースA～C）、年少人口の減少が下がり、上昇する局面を迎える。

● ケースA × ケースB ▲ ケースC ■ 社人研推計



● ケースA × ケースB ▲ ケースC ■ 社人研推計



出生率が向上した後は、高齢者に比べ若い世代が相対的に多くなっていくため、高齢化率が下がっていく。

出生率の向上が図られた場合（ケースA～C）、老年人口の増加がゆるやかに抑制される。社人研推計では、2050年以降も高齢化が進むのに対し、ケースAでは2050年で高齢化率が35.2%で高止まりする。

出典：昭和55年～平成22年までは国勢調査、平成27年～52年は社人研「日本の地域別将来推計人口（H25.3.27）」、平成57年以降は平成52年の出生・死亡・移動等の傾向がその後も継続すると仮定して推計した場合

2 人口移動によるシミュレーション

(現在 分析中です)

- 転入・転出の影響を踏まえた将来推計人口のシミュレーションを行います。

3 将来展望

(現在 分析中です)

- 「1 出生率によるシミュレーション」及び「2 人口移動によるシミュレーション」を踏まえ、吹田市が目指す将来の方向について展望します。